

イドとして活用する取り組みもみられる。

しかし、こういった合格者の活用はまだ限られているのが現状である。「人材育成型」は、合格後の能力向上や就職・起業のフォローアップに注力しているところに特徴があるが（特に「北海道フードマイスター認定」が典型）、「地域学型」と「総合型」ではそういったフォローアップは比較的手薄な印象を与える。

(5) 受験者数、合格率；受験者数の変動は懸念材料

次に試験についてであるが、試験の方式については、大部分は会場試験であるが、「松山観光文化コンシェルジュ検定初級」のように、回答を郵送させるものや、「まるとと浜松検定3級（2006年度 図表2）」など新聞紙上に問題を掲載するもの、「信州観光文化検定2～4級（2005年度 図表1）」などのようにWeb上で受験するものなど、方式は多様化している。

受験者数については、図表1、2からも、受験者数累計が3万人を超える「京都・観光文化検定」から、数十人規模のものまで、ばらつきが大きいことがわかる。図表6は最新実施試験1試験あたり受験者数（2007年4月時点、級別）の多い「ご当地検定」と少ない「ご当地検定」の例を示したもので、平均は約900人であるが、ばらつきが大きいことはここでもみてとれる。また、検定のタイプと受験者数の規模は必ずしも結び付いていないようである。

合格率に関しては、図表7に最新実施試験1試験あたり合格率（2007年4月時点で最新実施試験、級別）の高い「ご当地検定」と低い「ご当地検定」の例を示した。約6割を平均として、高い方ではほぼ100%、低い方では10%以下といったばらつきがある。ただ、低い方は、受験者数の少なさも一因となっていよう（図表6参照）。

なお、合格率の設定は、当該検定が合格者にどのような性格を与えるかという基本コンセプトと直接結び付いている点は留意する必要がある。つまり、当該地域に関して博覧強記な人物を選びインパクトのあるアピールを地域の内外に対して行うのであれば設定される合格率は低くなるし、一方で知識レベルは高くなくとも地域に関

図表6 最近の1試験当たりの受験者数(2007年4月現在)  
単位：人

多数	江戸文化歴史検定	3級	6,456
	京都・観光文化検定	3級	5,608
	富士山検定	3級	5,528
	京都・観光文化検定	2級	4,021
	奈良まほろばソムリエ検定	奈良通2級	3,544
少数	大江山鬼検定試験	学士	40
	大江山鬼検定試験	博士	40
	信州観光文化検定	1級	27
	佐世保こども検定	—	21
	いばらき何でも知っとこ検定		20
	金沢検定	上級	15
	平均		899

出典：ブランド研究所[2007]、同[2006]、各検定HPをもとに作成

図表7 最近の合格率(2007年4月現在)

高率	港まち気仙沼おもてなし検定	—	100.0%
	おたる案内人検定	2級	98.8%
	六甲・まや学検定	2級・3級	98.3%
	ナマハゲ伝導士認定	—	96.5%
	十勝の観光文化検定(とちかち検定)	—	95.3%
低率	金沢検定	上級	13.3%
	大江山鬼検定試験	学士	10.0%
	まるとと浜松検定	1級	8.0%
	大江山鬼検定試験	博士	2.5%
	信州観光文化検定	1級	0.0%
平均		63.0%	

出典：ブランド研究所[2007]、同[2006]をもとに作成

心を持った層の厚みを増すことを目指すのであれば、設定される合格率は高めになる。つまり、地域振興の目標へ向かう道筋の描き方の違いに応じて、主催者側が設定する難易度は変わってくるのである。

受験者数に関しては、例外もあるが（「京都・観光文化検定」）、初回の受験者数がピークで、次回以降急速に人数が減る傾向がある。たとえば、「かごしま検定マスター試験」の場合も、第1回はブーム的に約2,300人の受験者があったことは前述したが、2回目の試験は約800